

### 地雷除去に挑む 豊かで平和な大地への復興 ～大地よ よみがえれ～

山梨日立建機株式会社 代表取締役 雨宮 清

地雷は、世界120カ国以上におよそ1億個以上も埋設されているといわれている。地雷は人が踏むかまたは何らかの衝撃で爆発するまでは60年以上も生き続けている。内戦や戦争状態の国で戦いが終わり、国にようやく平和が訪れようとしている今、悪魔の兵器―地雷―は至る所で息を潜め、20分に1人が死傷している。地雷に遭った子どもたちは一瞬にして友達、家族、将来の夢を無くしてしまう。足が吹き飛ばされ、全身にやけどを負った幼いわが子を抱きしめる父親の姿には胸をえぐられる。

地雷との出会いは今から15年前の1994年に遡る。当時、商用で訪れたカンボジアの地で、豊かな日本で何不自由ない暮らしをしていた私は、想像も付かないような悲惨な状況を目の当たりにした。このときを境に人生は一変した。カンボジアの首都プノンペンで出会った少女と片足をなくした老婆の助けをを求める姿に私は戸惑い、これ程までに打ちのめされたのは初めてだった。

#### 地雷埋設の現状と被害状況

帰りの飛行機の中で、ゴールの見えない大きな課題を突きつけられ、不安に襲われながらも決意は使命感へと変わっていた。カンボジアから帰国すると直ちに地雷除去機の開発に向けて社内に6名の開発プロジェクトチームを結成し



1995年カンボジアにて(右端が雨宮)

た。当時は地雷どころか爆弾や火薬のことも分からず、何から手を付けてよいのかさえも分からなかった。その為、私は詳しいことを知っている人を探してはどこまでも訪ね歩いた。しかも日本国内では見たことも聞いたこともない、まさに未知の物を作ろうとしているのだ。そんな中、子どもの頃に田んぼで父の手伝いをしたときの耕運機や脱穀機を思い出し、それをベースに地雷除去機のイメージ作りが始まった。これを原点に開発を開始した。

土の中の地雷を掘り起こして爆破処理するアタッチメントのイメージはすぐに浮かんで来た。アイデアは次から次へと沸いてきて、やがて夜も眠れなくなっていた。

しかし、200を超える地雷の種類之多さと残忍な仕組みを知って驚いた。



発見された地雷



カンボジアの地雷原



人手による地雷除去の様子

地雷は、その国や土地性によって種類が多様で、カンボジアではポルポトと政府軍による激戦の跡地には大量の地雷と不発弾、学校周辺や道路付近、畑、近くの山林には対人地雷、また15度傾けただけで爆破するタチの悪い地雷などもある。安価なものでは1個300円で売られている。しかし、その撤去作業の殆どは人手によって行われ、1個の地雷を除去するのに日本円で10万円～20万円もかかる。世界の地雷を全部除去するには、1千年という気の遠くなるような歳月がかかるといわれる。

調査によってカンボジアでの手作業による地雷除去を妨げる多くの問題点が浮かび上がった。◎熱帯雨林のカンボジアは植生の生長が早いので、地雷原はジャングル化し、地雷除去をする前処理としての灌木伐採作業が、地雷除去作業全体の時間のうち70%を占める。

◎日中の気温は40度を越え、炎天下での作業は過酷であるばかりでなく、蚊によるマラリアや毒蛇の存在などの危険を伴う。

◎雨季は半年近く続き、地雷は浮いて流され、一度除去したところにも移動するため、非常に厄介である。

◎土に鉄分が多い上に、戦争時代の弾丸の破片等が散在し、探査の妨げになっている。

◎対人・対戦車地雷以外にも不発弾やボンビー爆弾等が散在している。

これらは地雷のあるほとんどの国が抱えている共通の問題であり、地雷除去作業は今も難航

している。開発はこれらの問題点の解決を前提に行ってきた。技術的には、800～1000度にもなる爆発温度や衝撃、竹、灌木、岩石などに取囲まれた地雷原の環境は国によって様々で、これらに対応する耐超高温性、耐摩耗性の高いカッター刃の開発は、これまでになかった形状と金属配合によらなければならず、さらにオペレーターが乗るキャビンの防護性能や安全性の開発に明け暮れる日々が続いた。

こうして開発した機材だが地雷国に持っていかないとテストができない。当時は武器三原則に阻まれ、経済産業省の許可を取るのにそれから2年を要した。

テストは青森県下北自衛隊試験場、カンボジア、アフガニスタンで繰り返された。開発したばかりの対人地雷除去機を容赦なく爆破し、安全性と耐爆性、耐久性を試す過酷な試験が課せられた。当社の機械はいずれの性能テストも一回で通り抜けた。さらに納得がいかないところ



アフガニスタンでのテスト風景



アフガニスタンのジャララバードで水路の地雷除去後の川で泳いだ子どもたち

は機材を持ち帰って開発を重ねた。

2000年7月、日本のODAによる1号機の供与のため、私はアフガニスタンのジャララバードにいた。当時、地雷除去機は世界にも珍しく、初めて納入する日本の機材に現地の地雷除去団体(ATC)には不安と戸惑いがあった。しかし、雨季に川上から流れる地雷は、川下の縁に付いて川で遊ぶ多くの子どもたちや村人を傷つけていると聞き、水路の対人地雷除去を始めた。現地スタッフは、私が運転する機械での除去風景を見てニヤリと笑った。「日本製の機械で地雷が本当に取れるのか。」1995年から開発してきた、プロジェクトスタッフが渾身の力で何回もの困難に打ち勝ってやっと完成した機材をバカにされたのだ。私は除去した後、地雷が残っていないことを証明するために裸足でそこを歩い



地雷原の学校での勉強風景



ニカラグアの高原野菜畑

て見せた。彼らに本気で開発してきた証を見せたかったからだ。現地スタッフは「わかった。」と言った。こうして私は現地の人々に受け入れられていった。

2001年9月、全米同時多発テロ事件の翌日、ニカラグアの首都マナグアで開かれる第3回対人地雷禁止条約(オタワ条約)締結国会議に出席し、同会場で対人地雷除去機のデモンストレーションを行うため、米国経由で中米のニカラグアへ向かった。当時はこの事件の厳戒態勢中で、成田まで行ったが飛行機が欠航し、2日間待たされてようやくニカラグアに辿り着いた。デモンストレーションは成功し、各国の要人から喝采を受けた。地雷を除去した跡地にはオレンジの木が植えられ、年間60万ケース、150万ドルの外貨を稼ぐまでになり、年間3,500人の雇用を創出した。ニカラグアは間もなく国土の全ての地域で地雷除去を終え、「地雷国」の汚



地雷除去の様子



復興した農地(サトウキビ畑)

名を返上すると当時の大統領から親書が届いた。現在も機材が稼働しているヒノデカ県は標高1200mの高地で、熱帯にありながら夏でも非常に涼しいことからコーヒーや高原野菜の生産に適した地域であり、復興されたあちこちの大地で農業が盛んに行われるようになった。また、2006年には通学路や学校周辺の地雷除去が終わり、多くの子どもたちが安全に学校へ行けるようになった。

カンボジアでは2000年から機材の供与を開始し、地雷原の中にある住居や小学校の地雷除去を行った。彼ら農民がバナナやサトウキビなどを植えて農民として自立できるまでに約5年間を要した。その後、日本の援助によって小学校が建てられ、運動場もでき、子どもたちの笑顔がそこに溢れていた。

このように、アフガニスタンでは裸足で安全性を確かめたり、ニカラグアでは地雷原に持ち込んだ機械の下でドアを開けた瞬間、地雷が爆発して右耳が聞こえなくなったりした。そして2007年11月12日のこと、開発に追われ、考え事をしていたら玄関で足を踏み外して大腿骨を折ってしまった。入院先の病院では、人工関節を入れる緊急手術が行われることになり、全身麻酔は回復が遅れるとのことで、局部麻酔で痛みに堪えて手術に臨んだ。5日後に地雷講演を控えていた私は、とにかく早く治して欲しかった。このことを医者に告げると、「雨宮さん、今の



大腿骨を骨折し車椅子で(右 雨宮)

状況が分かりますか。何を考えているんですか。講演よりも治すことを考える方が先でしょう。」と怒鳴られた。今回の講演会は、ある家族から1通の手紙を頂いていて、どうしても行かなければならなかった。手術は、激痛を伴ったが、日ごろ、カンボジアなどで手足を失ったり、苦痛に堪える人々や子どもたちの姿を見てきた私にとっては、この痛みは堪えられるものだと思った。こうして今では、ボロボロの体になってしまったが、それでも地雷原で新開発の機材を試運転したり、初めて地雷除去機を納車する地雷国では自ら運転し、その安全性を実証してみせる。気がついたら知らないうちに地雷処理に命をかけた人生になっていて、今は使命感として受け入れている。日本に帰って来ると、こうして生きているのが不思議に思うことがしばし



後部に装着したリッパーで農地復興



地雷を除去した跡地に種まき(カンボジア)

ばある。

1号機が完成したのが1998年。翌年よりカンボジアで処理を開始し、現在、カンボジア、アフガニスタン、ニカラグア、ベトナム、アンゴラの世界5カ国で68台の地雷除去機が活躍している。

最近開発したプッシュ式フレールは、本体の前に取り付けられたハンマーで対人地雷を取り除きながら同時に後ろのレーキで耕して畑にする機材で、万が一、対戦車や不発弾に遭遇してもオペレーターの安全性確保はもちろん、最小限の作業での復旧整備を可能にした。

肥沃な大地がよみがえり、種を蒔き、お米や野菜、果物を作り、それを売ってお金にし、家族の着る物や靴を買い、薬も買えて地雷原に住んでいた人々が平和で安心して暮らせる日を取り戻し、そして子どもたちが学校へ通って普通の暮らしが戻った時、私が国際貢献の意味を実感する瞬間である。

「雨宮さんは、なぜ他人のために命までもかけるのか」とよく聞かれる。1962年3月、私は中学を卒業すると就職列車に乗って上京し、必死で働いた。一所懸命、働くことが美德とされる時代だった。23歳の時、山梨に戻って山梨日立建機の前身の会社を設立した。それから25年後、カンボジアで老婆と少女に出会ったのだ。あの出会いは初めて自分を見つめなおす機会を

与えてくれた。すでに47歳を過ぎていた。私をその気にさせたのは、どんな国の子どもたちにとっても未来は平等であるということだ。人間として生まれたからには生きて幸せになる権利がある。世界の貧しい国の人々も人間らしく、あるべき姿でいられるために、日本人技術者として世界の地雷国に住む人々のために惜しまぬ努力を注ぎたいと思っている。そして地雷原が、豊かで平和な大地に変わり、子どもたちの笑顔が世界に広がっていくことが私の切なる願いである。こんなふうには知らず知らずのうちに地雷国の人々に心を引かれていった。気がついてみれば「命がけ」になっていたのかもしれない。

また、私を夢中にさせたのは、「本当に役立つものづくり、本当に造って喜ばれるものづくり。」である。私はこの14年間、このことを念頭に地雷除去のための機材を開発してきた。レントゲンの機械を送っても電気がない。フィルムがなくなればそれで放置される。車を100台送っても燃料は現地で調達しなければ動かない。形だけの国際貢献はうんざりするほど見てきた。本当の国際貢献とは、我々が持っている技術を貧しい国の人々に提供し、その国の不足の原点に飛び込み、心底から手助けとなる方策を見つけ出し改善のために実行することである。カンボジアを筆頭に、実際に収入が少なかった彼らが毎月200ドルから300ドルを稼げるようになったのだ。だから、我々が持っている技術をできる限り提供していきたいと思っている。本当に強



絵や版画を描いてくれた日本の児童



日本の子どもたちが描いた絵を手にするカンボジアの子どもたち

く世界の平和を願う人々のうちのひとりとして。

### 地雷除去活動への想い

私は、これまで地雷除去機の納入国、地雷埋設国及び日本国内において、技術の指導、機材供与、地域学校支援、地雷除去の復興支援、そして地雷被害者の慰問活動を行ってきた。ここ数年は日本国内で学校・企業・団体に自分の体験をもとに講演活動を行ってきた。小中高・大学を中心に北海道から九州、沖縄まで講演活動に力を入れ、昨年83回を数える。実際に地雷除去機を持ち込み、模擬地雷を地中に埋め地雷の怖さを伝えるデモンストレーションを行ったこともある。手作業で地雷を除去する危険と大変さ、地雷国の人々の苦しみを知ることの大切さ、特に「命の大切さ、人の気持ちを分かり合うことの大切さ。」を伝えている。また、日本の子どもたちからの現地に向けた手紙、絵や版画なども持参して、被害にあった人々への励ましや交流も行っている。

日本では今、人の命の大切さが失われつつある。毎日のように親が子を殺し、子が親を殺す事件が報道されている。カンボジアやアフリカでは生きるのに精一杯で人が人を殺すなんてことは考えられない。地雷原で暮らす人々は貧しいが家族や友達の絆、命の大切さを知っている。そういう姿、地雷原に暮らす人々の生き様を日

本の子どもたちに伝えたい。

また、企業にとってCSRは非常に大事な時代に入って来たが、社会貢献及び国際貢献は人の心を豊かにすると思う。一人ひとりが人のために何かをし、CSRの理解を深めていくと心の豊かさが家族や周囲に伝わっていくのである。

日本全国のお年寄りから小学生まで幅広い年齢層の方からたくさんの手紙を戴く。その文面で全国の皆様から励ましや激励のお言葉を頂戴し、感謝の気持ちでいっぱいだ。ある中学生は、「世界の人々のために生きていく自分を見つけ出したい。」と書き、高校生や専門学校生の中には「今後の進路に対してまじめに取り組み、少しでも人のためになれる仕事がしたい。」と書く人もいる。こういった言葉を見つけるとうれしくて目頭が熱くなる。

「技術者はモノづくりの挑戦者であり、技術の根源はモノづくりと人づくりにある。」これが私の座右の銘だ。今の日本は、モノづくりと人づくりがアジア諸外国にとって代わられてきた。情けないことだ。さらに日本は少子化が進み、人手、すなわち技術者の数は減る一方だ。企業はこれまで人を大切に、技術者を育成し今の日本を作ってきた。「職人の魂」をもう一度振りかえってみる時ではないか。

今、私が造った地雷除去機が稼動する地雷国では、少しずつではあるが復興が進んでいる。地雷で冒された大地に住む人々が、よみがえった農地で額に汗して働く喜びの声や、グランドではしゃぐ子どもたちの声は、聞こえなくなった私の右耳にも聞こえてくる。

私は友人や仲間そして家族に恵まれてきた。常に私を支えてきてくれた関係者や従業員に感謝している。そして、いつも心配をかけてきた家族、とりわけ妻には感謝の気持ちを言い尽くせない。